

氏名(国籍)	潘心瑩(台湾)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第4206号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	台湾語母語話者における日本語アクセントの知覚

主査	筑波大学教授	博士(文学)	湯沢 質 幸
副査	筑波大学教授	Ph. D.(言語学)	岡崎 敏 雄
副査	筑波大学教授	Ph. D.(日本語学)	カイザー, シュテファン
副査	筑波大学助教授	博士(言語学)	劉 勳 寧
副査	筑波大学講師	博士(人文科学)	一二三 朋 子

## 論文の内容の要旨

本論文の目的は、台湾語母語話者における日本語アクセント教育の基盤を築くために、次の三点を説明することにある。

- (1) 台湾語母語話者は日本語アクセントをどのように聞き取っているか。
- (2) 聞き取り上、学習歴別にどのような特徴が現れるか。
- (3) 母語の声調上の特徴が日本語アクセントの知覚にどのような影響を及ぼしているか。

従来の日本語教育研究においては、多く、対照分析研究や誤用分析研究あるいは中間言語研究がそれぞれ個別的行われてきた。もとよりそれぞれの成果には見るべきものがあるが、学習上生じる問題を適切かつ迅速に解決するには、これらの研究を総合した研究こそ必要であると考えられる。このような見方に立って本論文は、これら3つの観点を柱に据えつつ総合的な視点からデータの分析を行い、また問題の解決に当たっている。

「第1章 序論」は、本論文の目的および意義を述べるとともに、先行研究ではなお説明不十分な、もしくは未解決の問題の指摘を行っている。

「第2章 日本語アクセントに対する知覚調査」は、台湾語母語話者を対象として行った、日本語アクセントの知覚調査の結果をまとめ、台湾語母語話者が日本語を聞いた時、それをどのようなアクセント型の語ととらえているのか、また、なぜそのようなとらえるのかを、統計学的手法を用いて追究している。知覚調査は、被験者を日本語を専攻する台湾語母語話者、日本語を専攻していないが日本語を学習している台湾語母語話者、日本語をまったく学習したことのない台湾語母語話者の三群に分けて実施している。そして、その結果を群ごと、また調査語の拍数ごとに分けて横断的な視点から分析している。すなわち、被験者別正答率、アクセント別正答率、および各被験者集団におけるアクセント別正答率などに基づいて、例えば次のような、種々の事実や傾向を指摘している。

- ①日本語学習歴の有無や長短にかかわらず、拍数が増えるにつれて正答率は低くなる。
- ②2拍語の場合は、学習歴とは関係なく尾高型の正答率が低い。日本語専攻群は平板型の正答率が高いが、

非日本語専攻群と日本語学習歴零群は頭高型の正答率が高い。また、3拍語の場合は、日本語学習歴のある者は平板型の正答率が高いが、日本語学習歴のない台湾語母語話者は中高型の正答率が高い。

③日本語専攻群は総じて中高型に聞き取る傾向がある。また、非日本語専攻群は、刺激語の拍数にかかわらず後ろ2拍においてよく混同を生じる。

「第3章 台湾語の韻律的特徴」は、まず台湾語の声調の特色を先行説を整理しながらまとめ、次に『新編華台語対照典』(2002)を利用して台湾の日常語における韻律的特徴をとらえている。その後、統計学的手法によりながら、台湾語には例えば次のような傾向が顕著に認められるとしている。

①当該語の音節数にかかわらず、1音節目に立つ音節は平調のものがもっとも多い。これに対して上昇調のものはない。

②2音節語を除くと、最終音節の声調は下降調である場合がもっとも多い。これに対して、上昇調である場合はもっとも少ない。

③音節間における高低変動のあり方は、各音節語ごとに異なる。

「第4章 知覚調査の結果分析－対照言語学的観点から－」は、第2章、第3章を踏まえて、台湾語の韻律的特徴が日本語アクセントの知覚にどのような影響を及ぼしているのかを、対照言語学的な観点から明らかにしている。

①2拍語においては、学習歴の有無・程度にかかわらず、尾高型のアクセントを弁別するのがむずかしいという傾向が認められる。また、非日本語専攻群と日本語学習歴のない台湾語母語話者の場合、平板型よりも頭高型の方が正答率が高い。一方、日本語学習歴零群では、すべてのモデル音声を頭高型として聞き取る傾向が顕著である。これは、母語の影響の強弱によると考えられる。

②3拍語においては、学習歴の有無等にかかわらず、平板型と中高型のアクセントは弁別しやすいという傾向が認められる。また日本語学習歴のない台湾語母語話者の場合、平板型より中高型、そして尾高型より頭高型のほうが正答率が高い。これは母語の干渉と考えられる。

③4拍語においては、尾高型の場合アクセント核の位置が弁別しにくいという傾向が認められる。これは母語の転移と考えられる。

「第5章 知覚調査の結果分析－音響音声学的観点から－」は、知覚調査の結果を音響音声学的な面から分析し、そして、それによって日本語学習者の知覚する日本語アクセントの中間言語的な様相をとらえるとともに、日本語学習者における日本語アクセントの知覚上の問題がどこにあるのかを指摘している。すなわち、台湾語母語話者における日本語アクセントの知覚上の特徴は、基本周波数曲線によって示される音響的の最高点およびその最高点を含む近隣にある、言い換えると高い部分の積極的な聞き取りにあると推定されることを述べている。

「第6章 結論」は、第5章までの内容をまとめて提示するとともに、今後の展望について述べている。

## 審査の結果の要旨

戦後における日本語教育が本格化した1970代以降、台湾では日本語教育が盛んに行われてきた。ただし、その中心は語彙あるいは文法教育であり、音声教育は必ずしも熱心になされてこなかった。近年この点が反省され、音声教育へも力が注がれるようになってきた。しかしながら、アクセント教育はなお十分なされるには至っていない。このような現状を踏まえて書かれた点において、本論文は時宜を得たものと言える。

本論文は、まず最初に、日本語アクセントの知覚調査によって得られた多量のデータと、辞書の調査によって得られた膨大な台湾語韻律に関わるデータを、統計学的手法を用いたり類型化を行ったりして丹念に処理する。次に、処理したデータをその性格に応じつつ対照研究や誤用研究などの手法を用いて逐一分析する。

そして、その結果に基づいて自説を構築する。このような処理の仕方や実証的な論の進め方は妥当であり、当然そこから導かれる結論も是認さるべきものとなる。言うまでもなく、このことは当初本論文の設けた目的が十分達成されたこと、つまり、本論文が台湾語母語話者における日本語アクセント教育に大いに資するものであることを、如実に物語っている。

ただし、知覚調査における北京語関与の有無・程度のことや台湾日常語の使用頻度のことなど、残された課題も少なくない。しかしながら、これは本論文が先駆的な研究であることによるものであり、決して本論文の価値を損なうものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。